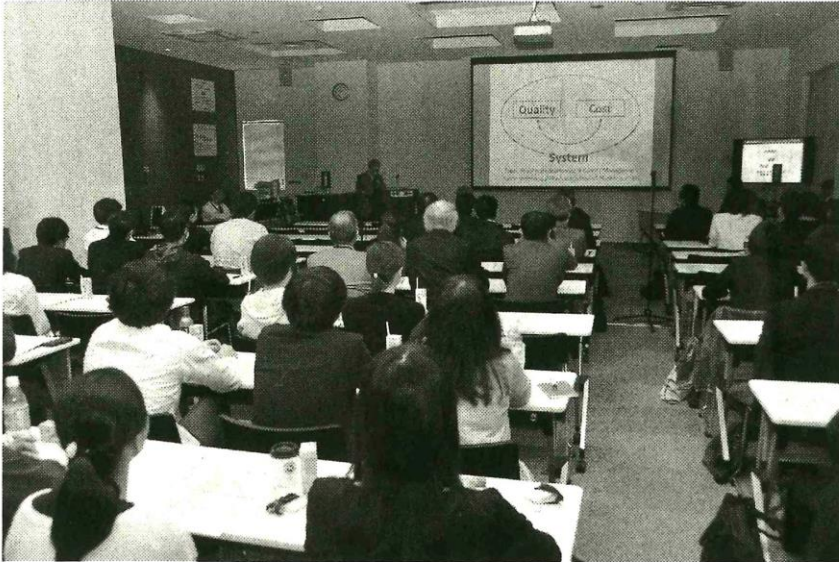


医療介護「可視化」必須

質の向上テーマに意見交換

日本医療マネジメント学会の「第18回北海道支部学術集会」が、室蘭市知利別町の製鉄記念室蘭病院がん診療センターで開かれ、「医療の質の向上を目指す取り組み」をテーマに、全道の医療関係者らが意見を交わしたほか、特別講演などを通し、医療の質に関する現状や将来の方向性などについて理解を深めた。

(松岡秀宜)



「医療の質の向上を目指す取り組み」をテーマに意見を交わした学術集会

同病院での開催は、2004年(平成16年)に、同病院の前身・新日鉄室蘭総合病院で開かれて以来2回目。今月14日に開かれ、全道の医療機関から医師や看護師、病院職員など約100人が参加した。

特別講演では、京都大学医療経済学分野の今中雄一教授が「これからの医療介護経営と可視化の展開・データ、組織、地域」、国立病院機構北海道がんセンターの加藤秀則院長が「がん診療の質の向上について」北海道がんセンターでの取り組み」をテーマに、それぞれ解説した。

今中教授は、超少子高齢化社会の進行に社会保障財政のひっ迫、規制改革、医療訴訟の増加などから「医療の経営はますます難しくなっている」とし、「病院レベルの可視化に加え、地域し

製鉄記念室蘭病院 マネジメント学会「道支部集会」

ベルの医療介護のパフォーマンスや健康状態を計測し、可視化することが必須」などと指摘した。

その上で、「内外環境の把握力を高め、多職種協働力を強め、医療人の働くモチベーションを高め、組織の魅力を内外で発信することも重要性が増してくる」などと述べた。

一方、加藤院長は、がん専門病院として①抗がん剤に関係すること②手術③放射線治療④看護部門の強化⑤検査・ME(医学領域で用いられる電子機器の研究・開発を行う分野)・リハビリ部門に関連して⑥キャンサーボードに「力を入れて、がん診療の質の向上に取り組んでいる」と強調。

その上で、がん専門薬剤師養成やがん専門看護師の外来注射室への専従配置、口腔腫瘍センターなどのセンター化によるチーム手術、がん専門分野における質の高い看護師育成研修の開催などの取り組みを紹介した。

また、一般演題では医療・情報システム、経営改善・業務効率化、リスクマネジメント、医療の質向上などのテーマに沿って、計22題が発表。参加者も各施設の現状などの報告に真剣に耳を傾けていた。